

優しい涙をありがとう

佐野正芳

島根県・六四・無職

悪性リンパ腫Ⅲ期の癌告知を受けて一四年目を迎えました。

二人の息子にも恵まれ、人生の絶頂期にあった四九歳の夏は地獄の炎暑に一変しました。

二週間の検査が終わり私の病名が告げられた日、貴女は病院からの帰り道を間違えました。その日は長い長い闘病生活の始まりであり、苦しみの始まりでもありました。

化学療法が始まると、吐き気と倦怠感にぐったりしている私の体を拭きながら、何時もベッドの脇で励まし続けてくれました。

一年半の化学療法で腫瘍はことごとく消え、喜びいさんで職場復帰したのも束の間、一年後に再発しました。

再発、それは余命短しの不安との闘いでもありました。

脂汗まみれで受けた化学療法。それは苦闘の日々であり、貴女の身も心もやつれさせていました。

その代償のように私は奇跡的に生還しました。

余生は故郷でとの私の願望から故郷へ帰住しました。故郷での平穏な日々は、癌再発の恐怖を遠ざけました。

その油断を嘲る^{あざけ}ように癌は再発しました。

「骨髓移植」の根本治療が必要です。主治医の言葉に震えました。

「大丈夫よ。必ず成功しますよ」

貴女の言葉に押され、治療を受ける決心をしました。

クリーン・ルームのビニールのカーテン越しに日夜励ましてくれました。貴女の励ましを受け、骨髓の破壊、移植と治療は順調に進みました。

新たな血液の誕生を知らされたとき、主治医の手を握って泣きました。

カーテンの向こうの貴女の嗚咽^{おと}にまた泣きました。

これからの一日一日を大切に生きたいと思っています。沢山の優しい涙をありがとう。

*職場でも家庭でも恵まれ、人生の絶頂期の癌告知。人生は一変しました。妻の涙は私の血となり、そのお陰で今日の生命をいただきました。